

《実践報告》

高等学校福祉科「社会福祉実習」における授業実践
－実習指導における描画の活用と成果－

A Class Practice Report of Social Welfare Practice as a Subject Social in Japanese High Schools :
Practical Use and Result of Drawing on instructional Seminar

新潟県立八海高等学校教諭・研究所客員研究員 中川 裕輝

Hiroki Nakagawa

所長 中島 豊

Yutaka Nakajima

1. はじめに

2003（平成15）年度より高等学校に専門教科「福祉」が開設され、10年が経とうとしている。この間、教科「福祉」について、日本福祉教育・ボランティア学習学会を中心に、精力的に研究がなされ成果をあげてきていると考えられる（日本福祉教育・ボランティア学習学会年報、Vol.13、2008）。しかしながら、「専門教科ゆえの特化した目的・内容や限定的な実践の機会などから、研究及び実践成果の蓄積は量質ともに十分なレベルに達していないといえる」（光田、2009）との指摘がある。また、は、「教科『福祉科』を担当する教員が直面している指導上の課題を子どもの学びと対応させた形で構造的に分析した実証的研究はほとんど見られない」（永原、2008）との指摘もある。

筆者の一人である中島が調べた限りでは、特に科目に即した授業実践や研究の報告は乏しいように思える。『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』を読む限りでは、「社会福祉援助技術」に関わる芦川（2008）の実践報告くらいである。

授業実践や研究が定期的に取りあげられる場として、全国福祉高等学校長会の主催による「福祉担当教員等研究協議会」がある。そこでは、教員自身による「授業研究」が文章として報告され、それに基づいて口頭による発表が行なわれている。

る。しかし、開催は年一回であり、取りあげられる科目も一定しておらず、発表は1題に過ぎない。

また、社団法人日本社会福祉教育学校連盟が主催する「福祉教育研修講座」がある。これも年一回の開催で、そのなかに高校教員自らが模擬授業を行なう分科会がある。模擬授業では、各科目のうちから任意の科目が選ばれ、例えば「社会福祉基礎」の場合、公的年金制度など特定のテーマを取りあげて行なうものである。模擬授業終了後、高校教員や大学教員からなる参加者との授業検討が行なわれる。しかし、その後、模擬授業の内容が論文などとしてまとめられているかどうかは、筆者の知る限りではない。

そこで本稿では、筆者の一人である中川が教諭として勤務する新潟県立八海高等学校福祉科において、現に実践されている「社会福祉実習」を取りあげ、そのなかの事前・事後指導に焦点をあてて、授業で用いられている描画による指導について、その内容を整理すること（本稿3～5）、また、その作品を考察することにより生徒が学んだ内容を明らかにすること（本稿6）を目的とする。

2. 八海高等学校と福祉科の概略

新潟県立八海高等学校（以下、当校）は、新潟県の中越地方、米どころ魚沼地域の南魚沼市の旧六日町にある。前身は六日町女子高校で、1995（平成7）年、学科改編を機に校名を変更し、現在に

至っている。

学級数は1学年4クラスで、普通科2クラス、体育科1クラス、福祉科1クラスの構成となっている。体育科、福祉科ともに新潟県内では唯一の学科である。

福祉科では、訪問介護員（ホームヘルパー）養成研修2級課程を開設しており、また介護福祉士の受験資格が取得可能なカリキュラムを組んでいる。いずれも新潟県内公立高等学校で唯一であるが、社会福祉士及び介護福祉士法の改正の関係により、介護福祉士の受験資格の取得は2008（平成20）年度の入学生までの適用であり、2015（平成27）年度を以って閉科となる予定である。

3. 当校「社会福祉実習」の位置づけ

本報告の科目「社会福祉実習」は、上記の課程開設や資格取得に関係している。当校の「社会福祉実習」は、校外での実習（以下、校外実習）となり、参加できなければ、原則として修得できない。

校外実習は、2年生夏休みに、訪問介護員（ホームヘルパー）同行訪問実習2日間と施設実習4日間を行なう。加えて、介護福祉士受験資格を取得する福祉コースは2年生11月に6日間、3年生6月と10月に10日間ずつ施設実習があり、3年間で計30日間の施設実習を行なう。実習は訪問介護員同行訪問実習では生徒の居住地の訪問介護事業所で、施設実習では学校近隣の11施設のうちいずれかで行なう。施設はいずれも高齢者の入所施設である。

4. 学習指導要領と当校「社会福祉実習」の学習目標

2000（平成12）年に改訂された学習指導要領福祉科篇では、「社会福祉実習」の目標は以下の通り示されている。「介護等に関する体験的な学習を通して、総合的な知識と技術を習得させ、社会福祉の向上を図る実践的な能力と態度を育て

る」。

内容は、(1)介護技術の基本と実際、(2)高齢者と障害者の介護、(3)社会福祉現場実習となっている。特に、校外実習に含まれる社会福祉現場実習では、内容として、ア. 意義と目的、イ. オリエンテーション、ウ. 現場実習の実際、エ. 反省、記録が示されている。内容の構成及びその取扱いに当たっては、配慮事項として、現場実習の効果を高めるよう、事前及び事後の指導をすることを求められている。また、内容の範囲や程度についての配慮事項として、オリエンテーションでは、施設の概要や主な業務内容を扱うことを求められている。

以上のことをふまえて、当校における本科目の学習目標は、事前段階では、技術の獲得、利用者に関心を持つこと、実習するにふさわしい気持ちと姿勢を示すこととし、事後指導段階においては、実習での気づき、まとめ、座学と実習の統合としている。

また、各実習・各段階の校外実習の学習目標は、以下の通りである。

(1) 訪問介護員同行訪問実習(2年夏休み:2日間)

訪問介護員（ホームヘルパー）同行訪問実習を通して、在宅福祉の現状を知り、地域福祉のあり方を考える力を身につける。そのために以下のような点に着目する。

- ①在宅福祉における訪問介護員（ホームヘルパー）の業務内容を理解し、その役割について考える。
- ②利用者の日々の生活、思い、生活背景、生活環境等への理解を深める。
- ③利用者を支える在宅福祉サービスについての理解を深め、身近な地域の福祉について考える。

(2) 基礎実習(2年生、夏休み、4日間)・第1段階実習(福祉コース:2年生、11月6日間)

第1段階では、基礎実習での目標とその達成をふまえ、さらにそれを深めるよう継続的な取り組みとする。

- ①施設の概要について、利用者の視点から理解を

表1 「社会福祉実習」における授業計画の概要

2年生 (2単位)		3年生 (4単位)	
4月	○実習へ向けての心構え ○教科書学習	4月	○アセスメントの学習 ○実技の復習
5月	○実習生の存在について	5月	○実習目標設定
6月	○実習目標の設定 ○プライバシーについて ○実習記録の書き方	6月	●実習への気持ち Before & After ① ○施設実習 (第2段階実習) 10日間 ●実習への気持ち Before & After ②
7月	○訪問介護員(ヘルパー)同行訪問実習 2日間	7月	○実習のふりかえり
8月	○施設実習 (基礎実習) 4日間	8月	
9月	●思い出の1シーンを描いてみよう ○実習で学んだことの整理 ○夏の実習を発展させるために	9月	○アセスメントのふりかえり ○アセスメント実施へ向けての学習 ○ロールプレイを通じた学習 ○実習目標の設定
10月	○実習目標の設定	10月	○施設実習 (第3段階実習) 10日間 ●実習のふりかえりをしてみよう
11月	○3年生との交流会 ○施設実習 (第1段階実習) 6日間	11月	○アセスメントを基にケアプラン作成・発表
12月	●実習のふりかえりをしてみよう	12月	○1年間のまとめ
1月	○緊急時の対応を学ぼう	1月	○1年間のまとめ
2月	○具体的な介護		
3月	○3年生に向けてのまとめ		

* 訪問介護員(ヘルパー)同行訪問実習と施設実習(基礎実習)が入れ替わった年度もある。

* 網かけ部分(●印)が本稿に記したテーマであるが、その順序はモデルパターンとして作成したものであり、年度により前後している場合がある。

* 3年生の2、3月は、自宅学習(進学・就職準備の期間)になっている。

深める。

②利用者や家族を支える職員の役割について考える。

③施設の業務とその流れを知る。

④実習指導者の助言・指示を受けながら、利用者に関わることによって介護のあり方を体験的に理解する。

(3) 第2段階実習(福祉コース:3年生、6月、10日間)

①介護のあり方を体験的に理解し、基礎的な介護技術を身につける。

②行事、クラブ活動などの意義を考え、生活の様子を知る。

③職員の動きをよく見て、業務の流れを掴み、利

用者の生活を支える援助のあり方を考える。

④施設利用者との関わりを通して個別理解を深め、個々に合わせた働きかけを考える。

(4) 第3段階実習(福祉コース:3年生、10月、10日間)

①利用者をさまざまな側面から捉え、全体像を理解する。

②利用者との関わりや情報の中から、直面している問題点・ニーズを把握する。

③体験や見学を通して、個別に対応したケアの必要性を理解する。

これらの項目を元にして、生徒一人ひとりが実習の目標を立てて実習に臨む。実習目標について

は、毎回教員がそれぞれ2～5人を担当し、面談を重ねて作成している。

5. 事前・事後学習における描画制作

当校の「社会福祉実習」は、校外実習を中心に組み立てられている。

事前学習では、実技指導を実施し、実習施設の概要や実習の心構えを説明して、直前にはオリエンテーションを行なっている。事後学習は、実習後のふりかえりや反省会の実施、レポート集などの作成を行なっている。

筆者の一人である中川が8年前に赴任したころから、事前・事後学習において描画を用いて、実習前と実習後の気持ちを比べる「実習への気持ち」、実習中の出来事で一番印象に残ったことを描かせる「思い出のOneシーン」、実習での学びを確かなものとするための「実習のふりかえり」を表現させている。これらの指導法は中川にオリジナリティがあるものだけではなく、当校の他の教員が行っていたものを踏襲したものもある。現在では、担当教員が替わっても、毎年、ほぼ同じ時期に実施されるようになってきている。

この取り組みのきっかけは、日頃の提出物や実習日誌などで、文法や表記、慣用表現が間違っていたり、感じたことが正しく表現できていなかったり、そのため校外実習の毎日の記録が書けなかったり、と生徒の語彙力の不足や文章表現力の低下を感じたことからである。そこで、文章で説明することが難しければ絵によって説明できないか、と考えたことになっている。

(1) テーマと指導方法

生徒にはテーマと様式のみ説明し、自由に描かせている。その際、参考として前年度以前の先輩の生徒の作品を見せることもある。そのため、似かよったパターンになることも否めないが、モデルを示さないと描けない実態があるので、先輩生徒の作品を示している。授業は1単位時間(1コマ)のみで完結し、原則としてその時間内で描かせて

いる。

以下の3つのテーマにそって指導を行なっている。

1) 思い出のOneシーンを絵にしてみよう

実習中の出来事で思い出に残っていることを一つピックアップして表現する。実習中の失敗や一番楽しかったこと、あるいは実習するまで想像もしなかった出来事を描くことが多い。利用者との関わりのなかで素直に感銘を受けたシーンを描く場合もある。

2) 実習への気持ち Before & After

筆者の一人である中川が創案したものである。目的は、実習に対する不安や期待などの気持ちを表現することにある。

始めた当初は、実習終了後に、事前の気持ちを思い出しながら、事後にBeforeもAfterも同時に描かせていた。この指導方法は生徒自身の気持ちをその場でふりかえりながら比較し描くことで、その場で実習への気持ちの変化を感じさせることができた。しかし、実習前の気持ちが実習を経験することによって変化してしまうこともあるため、実習前の不安や心構えの甘さ、期待などの正直な気持ちが薄れてしまう問題があった。

上記のことに気づき、実習に行く前にBeforeを描かせ、一旦回収し、実習終了後にAfterを描かせる指導方法を採用ことにしたが、授業の進捗などの都合で、年度によっては事後に同時に描かせているときもあった。実習に行く前にBeforeを描かせると、不安は不安としてしっかり表現されており、よりはっきりと生徒自身の正直な気持ちが表現できている。実習後、Afterを描く際に見ることで、「自分はこんな気持ちで実習に臨んでいたのか」と忘れてしまっていた気持ちに気づくことができていた。

3) 実習のふりかえりをしてみよう

一枚の紙に、縦3つ横4つ程度の柁目をつくり、その柁目を利用して、様々な項目を自分で立てて

まとめさせていく。最初の頃は、「喜怒哀楽」などのキーワードを提示したが、いまは自由にさせている。また、枠目が使いにくい場合は無理に使わなくてもよしとしている。

(2) 指導上の留意点

描く前、生徒から「どんなことを描いてもいいか」と問いかけられ、「何を描いたからといってマイナスの評価をするものではない。実習での学び感想をまとめたレポート集は実習先にも送付するが、これは外部に出さず校内でのみ使う作品なので、描きたくても控えていた気持ちなどあれば、何でも自由に描いていい」と答えている。重要なのは、「基本的に何を描いてもよい」と最初に示しておくことである。最初にこのように設定することで、評価されるという生徒のこころの壁の高さを低めておく。そうしないと、実習への取り組みの度合いが測れなくなる虞があるといってもよい。

また、絵はきれいに描くことができなくても、描いてみようとするのが大切であるので、例えば、棒人間でもよいこととしている。あるいは、なかには絵を描くことを苦手とする生徒もいるので、絵に限らず記号や文字も用いてよいこととしている。

心理的な安心感を与え、表現方法に幅を持たせることで、生徒の拒否反応を回避する努力をしている。その結果、どの生徒も取り組んでいる。

6. 作品の考察

報告者は、絵や色彩による心理の変化に気づくことのできる専門知識を持ち合わせているわけではない。しかし、生徒の傍らにいる高校教員（中川）として、授業を行ない観察や会話を交わすなどするなかで、彼らの気持ちはおおよそ推察できていると考えている。また、福祉科教育法を教授する大学教員（中島）として、高校教員の解釈を聞き、それをふまえてさらに生徒の作品を読みこんで、気持ちを推察したものである。以下は、そ

れらの観点からの解釈や分析である。

なお、生徒の作品は色鉛筆などを使って描かせるため実物は色彩豊かであるが、本稿では印刷の都合上、白黒でしか表わされていないことをお断りしておく。

(1) 思い出の One シーンを絵にしてみよう

図アは、2年生の訪問介護員養成研修における訪問介護員（ヘルパー）同行訪問実習でのワンシーンを描いたものである。絵が基本であるが、苦手である生徒もおり、表現の幅を広げるために文字や文章を入れてもよいこととしている。

施設実習を終え、訪問介護員同行訪問実習の最終日となり、「頑張るぞ」と意欲満々で訪問したものの、利用者から実習生（生徒）がいると話がしづらいとのことで、奥の台所で利用者職員のみが会話をしている。テーブルの上にはおいしそうな料理がのっていて、利用者宅のかわいい猫もかまいたくなる。会話の間、ずっと立ったまま待たされているシーンを描いたものである。生徒にとっては自分の何が悪かったのかと自問自答し、大変なショックを受けた気持ちを正直に表現している。猫好きの生徒であったため、猫のことも気になっていた様子が見える。

実習生（生徒）一人になってしまい、何をしたらいいかわからずポツンとなる状況は多い。ましてや自分から関わりたいと思って訪問したものの拒否され、利用者に関わることの難しさを実感することとなった。

この生徒は、あまり目立たない性格で、それまで積極的に何かをするということにはなかった。実習最終日にこのようなショックを受けたが、実習でやり遂げることの大切さを理解したと思われ、その後、コツコツと努力して、卒業後、製菓学校への入学という自分の目標とすることを成し遂げた生徒である。

図イは、3年生の春の10日間の第2段階実習での印象に残ったワンシーンを絵にしたものである。

利用者の幻覚に寄り添うという貴重な経験をし

たことから描いたものである。利用者には衣類棚の中に蛇がいるのが見えるようで、車いすから立ちあがり追い払おうとした。生徒は転倒の危険があることを理解したため、代わって追い払うことにした。しかし、利用者には見えている蛇が生徒には当然、見えるわけがなく、また幻覚を否定するわけにもいかず、利用者となんとかやり取りをしながら生徒にも見えているものとして追い払った、というシーンである。

この絵と文章から、利用者の世界を大切にすることや利用者に寄り添うことを、授業で学んだ理論をふまえて体験として実感し、しかも素直なところで接していた様子が窺える。

(2) 実習への気持ち Before & After

図ウは、3年次の春の10日間の実習後にBeforeとAfterを同時に描かせたものである。3年次には実習先が2年次とは異なるため、実習先に対する不安も起きてくるが、一番成長できる時期でもある。自分を花に例えて成長ができたと表現しているほか、「花の周りにいる蝶は、福祉コースの仲間や教員、施設職員、利用者を表現しており、さまざまな人が支えてくれていることに気づいた」と、この生徒は発言している。成長を植物に例える表現は比較的多く、描画は可もなく不可もなくといったところであるが、鉢のなかにある文章はよく書かれている。

図エは、2年次の11月の6日間の実習後に図ウと同様、BeforeとAfterを同時に描かせたものである。図を見ると、左の実習前は、縦や横、特に斜めに筋(線)が引かれ、その幅も一定ではない。こころのなかの混乱している様子が描かれている。右の実習後は、横になり安定し幅も均等に層化され、下から2番目は橙色であるが黒の線がやや混じり、完全には安定に至っていないことが想像される。しかし、実習前とは比べようもないくらい落ちついてきていることが読み取れる。

この生徒は福祉コースに進んで学習を重ねていくうちに、自分が福祉に向いているかどうか、悩みに悩んで苦しい思いをした生徒である。しかし、

決して逃げなかった生徒で、最終的には福祉には関わりのない一般就職を選んで卒業した。

(3) 実習のふりかえりをしてみよう

実習のふりかえりとして、すべての実習が終了した時点で描かせることが多く、この時期の作品は、見ていると“なるほど”と感心させられるものが多い。2年生からの実習段階をふむごとに成長してきた内容を、生徒なりに整理し理解していることが見て取れる。

このことは、図オを描いた生徒に現われている。表現方法も天気にも例えて個性豊かに表わしている。最初の実習である2年生の訪問介護員(ヘルパー)同行訪問実習は「あめときどきはれ」、基礎実習を含む第1段階実習は「あめときどきくもり風強め」、3年生1学期の第2段階実習は「はれときどき台風のちくもり」、2学期の第3段階実習は「はれたまにくもりだけどはれ」と評価している。実習の難しさと成長の段階をよく表していると思える。

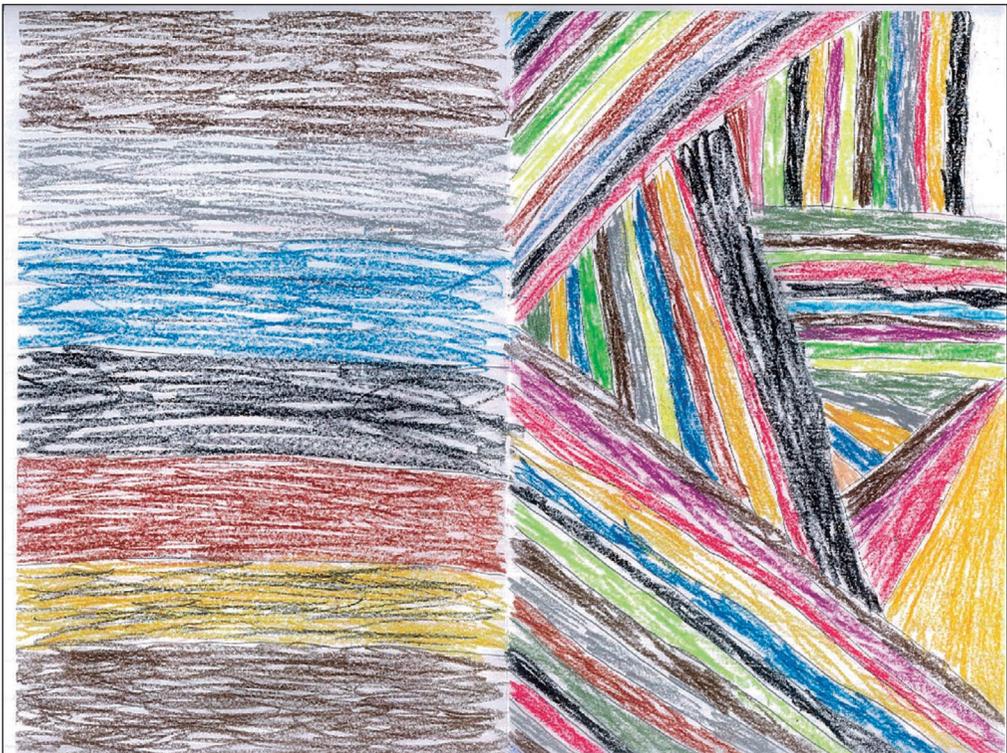
訪問介護員(ヘルパー)同行訪問実習は、「あめ」で始まる。「初めての实習で右往左往しながら」と書いている。しかし、うまくいった点もいくつかあったのであろう、「ときどきはれ」としている。第1段階実習では、いよいよ本格的な実習となり、「日誌、コミュニケーション、介助」とすべきことが多く、「不安と緊張の連続」で、「職員のみばかり気になり利用者よりも自分のことで精一杯」だったため、「あめときどきくもり風強め」である。

第2段階実習では、実習も3回目となり慣れてきているが、「アセスメントや失敗に対する不安」が募る。「緊張の中でやらせていただいた介助、声がけもあまりできず利用者にも伝わらず不快な気持ちを与えてしまったり怒らせてしまったり」、そんなことから「利用者を避けるようになってしまった。その上、職員からチャンスを与えられたにもかかわらず、うまくできないかもしれないという不安から消極的になってしまった。それで、「はれときどき台風のちくもり」としたように思

図ウ



図工



図オ

私の 実習 30日 + 2日			
<p>ハイパー実習</p> <p>あめ ときどき はれ</p> <p>定めておいての実習で 高倍率で進めると あんなに早く終わる と、思っていたけれど</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>いざとなれば、お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>3段階実習</p> <p>はれ たまに くもり たけどはれ</p> <p>最後の3段階 実習、お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>
<p>1段階実習</p> <p>あめ ときどき くもり 曇り 雨 曇り</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>
<p>2段階実習</p> <p>はれ ときどき 曇り あすこもり</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>
<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>

図力

<p>優</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>感謝</p> <p>ありがとう</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>
<p>実際に介助するとは練習とは全然違っていて、うまくできなかった。2人の介助の難しさ、大変さを実感することができた。</p>	<p>難</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>悲</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>2人の利用者の死。人の死というものを経験したことの私にとって、多く関わった2人の利用者の死というのとは、とても悲しくて辛いものでした。</p>
<p>癒</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>歌</p> <p>music</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>喜</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>
<p>ほとんどの利用者さんの事が大好きだと書いています。利用者さんの名前がなくて、利用者さんの名前がなくて、利用者さんの名前がなくて……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>	<p>幸</p> <p>お礼、感謝、お言葉、交流……</p>

実習を通して学んだこと

われる。

第3段階実習では、最後の実習となるので「悔いが残らないよう、自分に正直になって実習したい」と臨み、「今までのどの実習よりも利用者に関わることが楽しかった」と書いている。そう思えるようになったのは、利用者と同様になったことや業務の流れがわかり、「心に余裕ができたことが大きい。しかし、「介助の失敗もあった」。「失敗したからこそ、介助一つ一つの大切さ、技術を磨くことの重要性、そして何よりすべての行動に責任を持たなくてはいけないのだと身をもって感じる事ができた」。それゆえ「はれたまにくもりだけどはれ」なのである。

2年生当初のぼおとしていたころと比べると、次第に実習を自覚し、やがて覚悟をもって臨み、ふりかえりを通して実習の整理を行なうことで、生徒自身も成長を実感できていることがわかる。

また、高齢者施設であるがゆえ、利用者の死に出会うことは避けられない。死の場面に直接立ち会うことはなくても、元気だった人が実習中に亡くなることもある。図オの生徒は、3年生第2段階実習で出会っている。そして、「利用者の方の死の近さを知った。自分たちよりも（略）ずっとずっと死に近いことを知った。その人生の重さ、存在の大きさ、死とむきあわなくてはいけないこと。あまりに大きい、重い出来事だった」と書き記している。

図カ、図キの生徒は、第3段階実習に行ったとき第2段階実習で関わった利用者の死を知った。図カの生徒も「人の死というものを経験したことのない私にとって、多く関わった2人の利用者の死は、とても悲しくて辛いものでした」と書き記している。

実習のわずかな期間であるとはいえ、身近に接した利用者の死は、生徒に与える衝撃が大きい。つらく悲しい体験であるが、実習に真剣に臨み、真剣に利用者に関わった生徒であれば、その死とむきあいそれを乗り越えて、人の存在の重さや人生の深さに思いを馳せ、利用者と同様という関

係だけでなく人と人の関わりの大切さを感じ取ることができるようになってきていると思える。

さらに、利用者、職員、教員などとの関わりから感じ取ったり、指摘されたりしたことについて、考えを深めようとしている姿勢が見て取れる。

図クの生徒は、「苦しかったこと」として利用者を怒らせてしまい、職員に「あの人はいつもそうだから気にしないで」と言葉がけをされるものの、それを流さずにしっかりと受けとめ「絶対に何かなければ人は怒らないはずで、私のせいなのに利用者のせいのような雰囲気になされてしまい、本当に申し訳なかった」と利用者を気遣っている。」

また、巡回に来た教員に、利用者を身内のように大切に思う気持ちがないのではないか、という指摘を受け、「確かに、自分は実習生という枠から抜け出せなかったからいつも利用者と同様であったかなあと考えた」と内省している。

田村（2008）は福祉科卒業生「は他者の人生に接し、生活に根ざした体験的な学習を通して、幅広い教養と人間性を育てる重要な時期を高校福祉科で過ごしている」と、高校福祉科卒業生のライフコース研究の意義の一つとして述べているが、作品の考察から、当校福祉科の生徒たちは、実習を通して他者の人生に接し、幅広い教養と人間性を培ったといえると思う。

7. 成果と課題

文章や言葉ではうまく表現できないことが、絵の描き方や色づかいなどに表われる。また、描くことにより、生徒自身の気持ちの整理ができるといえる。文章表現がうまくいかない生徒もこの作業により、実習のふりかえりのきっかけをつかみ、その後の学習に生かすことができている。文書表現力がなくなっているといわれる近年の生徒には、このような手法も積極的に活用していく必要があると思う。

しかし、これらの方法を用いても生徒の表現力は低下している。それは表現力の低下というよりは、実習に対する向き合い方の不足という点も否めない面がある。そこに福祉科教員としての悩みがある。

生徒本人の獲得したものはある程度、明らかにされたが、これを教員がどこまで自覚化して伝えていくか。ふりかえり面接などの場の検討が今後、必要であろう。また、生徒同士の学びについても同様のことが言えよう。さらに、「はじめに」に示した永原の指摘については今後の課題としたい。

文献

- 芦川裕美「高等学校福祉科において社会福祉援助技術継続的に学習するための視点と内容－自己覚知とコミュニケーション能力の育成を目指して－」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』Vol.13、2008年、p.77-85
- 田村真広「高校福祉科教育に関する展望と課題」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』Vol.13、2008年、p.10-24
- 永原朗子「教科『福祉』担当教員に求められる子どもの学びに即した指導力に関わる課題－全国教科『福祉』担当教員への調査から－」『日本福祉教育・ボランティア学習学会年報』Vol.13、2008年、p.55-66
- 永原朗子「『福祉科教育法』の体系的指導法および教育プログラムの開発」科学研究費補助金研究成果報告書、2010年
- 光田尚美「高等学校『福祉科』の授業論に関する一考察－『行為する授業』の構想を手がかりに－」『社会福祉学部研究紀要』第12号、関西学院大学社会福祉学部、2009年、p.293-298
- 文部科学省『高等学校学習指導要領解説 福祉編』実教出版、2006年